

The Association of Liquid Filtration and Purification Industry

# LFPI News Letter

## Winter 2001 No.14

### エコタックスリフォーム



地球温暖化対策のためのハーグ会議は期待したほどの成果を出せなかったようです。温暖化に対して厳しい対策を主張するEUに対して、森林吸収量を最大限見積るような甘い対策や、排出権市場等のよう

な経済合理性を重視した対策を重視する日米が対立する構図でした。

地球レベルの政府組織がないなかで地球温暖化問題で世界レベルの合意を作ることの難しさがよくわかります。しかし、炭酸ガスなどの温暖化効果ガスの排出は続いており、温暖化の影響は極めて大きいという認識は変わりはありません。利害が対立して調整が難しいことは事実ですが、対立したままだと大きな被害を受ける国が大半ですから、いずれは意味のある合意ができるだろうと考えています。

これまでにさまざまな対策手段が議論されてきましたが、共通する傾向として、経済的な手段が重視されています。EUはハーグ会議で排出権取引制度に厳しい制限をつけることを主張しましたが、最終案では排出権取引に関しはかなり妥協していました。また、EUのなかですでに経済的手段が環境問題に対する対策として利用されることが多くなっていることから経済的手段に対してはむしろ積極的な面があります。

最近では、イギリスでの容器包装リサイクルシステムのリサイクル実績取引制度、デンマークの塩ビ・フタル酸税、ドイツの環境面で好ましくない容器に対する強制デポジット制度に関する議論等、経済的手段が導入されたり、真剣に議論されています。

スイスの友人と議論しているときに興味深い話を聞きま

した。ドイツ、北欧を中心として、エコタックスリフォームという概念が議論されているそうです。エコタックスリフォームとは、炭素税などの環境税を新たに課することにより環境問題を解決し、得られた税金は広義の法人税減税に回し政府としては税制中立にするという税制改革です。広義の法人税とは、年金制度のための企業の支払分を含むという意味です。

ポイントは年金制度に対する企業の支払額を軽減すれば、企業の実質人件費が下がり雇用の促進される点です。ヨーロッパでの失業問題は極めて深刻で、この問題の対策と環境問題のための苦い薬をセットにするアイデアです。この議論はどちらかというと経済界がもし環境税をかけるのであれば、政府は税制中立であるべきであり、かつ税金は(環境税によって損なわれた)企業の競争力が強化されるように使われるべきであるとの文脈で主張されているようです。

このアイデアの是非の評価は経済学者ではないのでできませんが、素人目にはなかなかのアイデアのように思えます。年金制度も改革して、税金をすべて年金の企業負担分の軽減に投入すると良いかも知れません。



協力会員  
LCP分科会幹事

石川雅紀

東京水産大学助教授

## 2000年記念シンポジウム<総括報告>



湘南国際村センター

2000年10月5、6日の両日、湘南国際村センター(神奈川県葉山町)において『2000年記念シンポジウム』が約

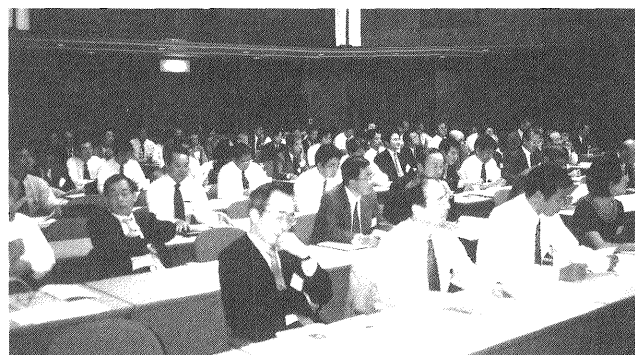
130人の参加者を得て開催された。「21世紀に向けての液体清澄化技術について考える」がメインテーマで、色々な立場からの興味深い講演が多数行われた。会場は葉山町の山の上の非常に見晴らしの良い場所にあり、設備も良く快適な2日間を過ごすことが出来た。

このシンポジウムは、20世紀が終わり21世紀を迎えるにあたって、液体清澄化技術の歴史を振り返り、将来はどうあ



講演会風景

るべきかを考えてみようという事から企画が始まった。科学産業活動を過去から俯瞰してみると、よく知られているようにコンドラチエフの波があり、数々のエポックとともに科学技術の革新がそれに沿って現れてきた。液体清澄化技術についても、開発のきっかけ、工業化と需要の拡大など過去の流れから学ぶことが多いと考え、「清澄化技術の創造と展開」として三つの単位操作についての講演を選んだ。また、当工業会には自ら企業を起こされたオーナー社長も多く、「私の履歴書」と題したお話をうかがえれば得るものが大きいと考えた。



真剣に聞き入る参加者

次に「過去から未来へ」と視点を移し、これからの液体清澄化技術のあるべき姿として、「グローバル化」、「環境」、「共生と競争」をキーワードにした講演会を設定した。この中には当工業会の規格・標準委員会、LCP分科会の報告及び、

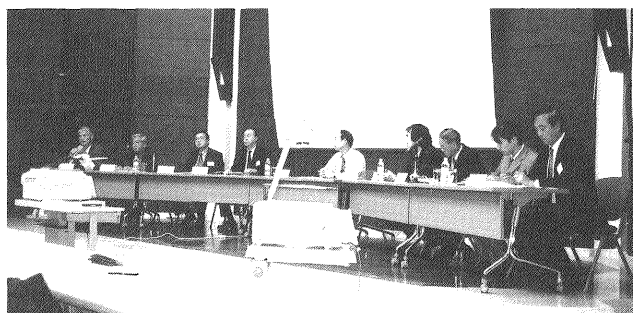


交流会/あちこちで交流の輪が出来る

国内国外からの招待講演を含めた。全体的にほぼ企画通りの講演をしていただき、中身の濃いシンポジウムであった。他業種の方の講演など非常に興味深く拝聴させていただいた。また、立食パーティでも、そここに話の輪が出来、会員間の交流が盛んに行われていた。

今回、当工業会初めの大規模なシンポジウムであり、時間配分など多少問題があったが、実行委員会で10ヶ月ほどかけて準備をしてきた甲斐が有り、まずまずの成功であったと思う。

最後に、この企画に携わってこられた方々及びLFPI事務局の方々に感謝申し上げます。 <日本ミリポア(株) 柚木 徹>



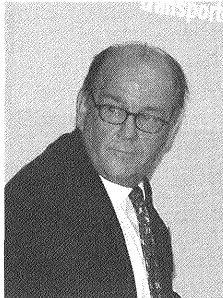
パネルディスカッション



参加者からも活発な発言が...

# 2000年記念シンポジウム報告<第1日目>

## 講演会(1) 清澄化技術の創造と展開/21世紀のリーダーシップを目指して—私の履歴書—



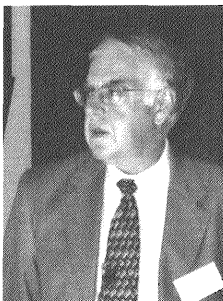
Hans Axelsson氏

### 第1題目の①「遠心分離概論」

Hans Axelsson 氏 (Alfa Laval Separation AB)

牛乳からクリームとの分離に始まった沈降型分離器の解説や、重力沈降・遠心ろ過に関する式、デリケートな溶液に対する処理方法等の解説を含め遠心分離器の開発史を概説していただ

いた。今後は、処理液による遠心分離器の選択だけでなく、ライフサイクルコストの検討も必要であろうと結んだ。講演中、



Anthony Allegrezza氏

目を見張ったのは世界一大きな遠心分離器の紹介でした。又、最新技術を駆使して作った動画のプレゼンテーションもすばらしかったのではないのでしょうか?

### ②「多孔質膜及び限外ろ過膜の開発と将来展望」Anthony Allegrezza 氏 (Millipore Corporation)

氏は現在北米の膜学会の理事を務められています。20世紀前半に開発された膜技術もなかなか発展を見なかったが、



足立 正氏

まず機械工業における洗浄水の製造に、その後、医療用液体の無菌化や飲料水の製造へとユーザーのニーズによって膜業会は発展してきました。どんなに優れた技術・装置を開発してもそれを使う人がいなければ、発展すること無く衰退してしまう。成熟した膜産業界において今後、精密ろ過とUF

とどちらが主流になるか現在のところ明白ではないが、分離性能の改善と経済性向上の努力により膜業会の進歩がある

と結んだ。

### ③「イオン交換樹脂、合成吸着剤を用いた吸着技術の展開」足立 正氏 (三菱化学㈱)

イオン交換樹脂・合成吸着剤の製造研究を始めて半世紀、当初の水処理だけでなく、食品、医薬、触媒分野から、最近話題の排水中の金属イオン・ホウ素等の回収除去への応用も行われている。さらに本



大矢晴彦教授

年、耐熱性陰イオン交換樹脂を開発し省エネルギー化、高反応速度化が図られた。また、工業用クロマト分離剤等の高付加価値製品の開発に取り組んでいるとの講演であった。



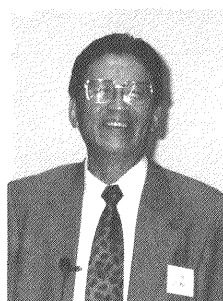
木村尚史教授

④「産官学共同の研究開発に賭けるか? 21世紀の液体清澄化技術」大矢晴彦 教授(横浜国立大学)

### ④「産官学共同の研究開発に賭けるか? 21世紀の液体清澄化技術」

大矢晴彦 教授(横浜国立大学)

一つの研究テーマを展開し実用化するには、長い年月と資金が必要不可欠であり、それぞれの長所を統合した産官



日下寛治社長

学の共同研究開発が成功への鍵を握る。そして、「好奇心旺盛であまのじゃくで上司から白い目で見られているあなた! 研究者として将来有望です」と結んだ。

そしてコーヒブレイク後、

### ⑤「21世紀のリーダーシップをめざして—私の履歴書—」と題して、木村尚史 教授(工学院大学)、日下寛治 社長(㈱トーケミ)、池田正明氏<植田玄彦 社長代理>(㈱セイシン企業)の御三方の半世紀以上を生きてこられた有意義な生の声を聞かせて頂きました。皆様それぞれに工夫を凝らし、逆境には思索して立ち向かい執念を持って努力する、それが成功への道であると感じられました。21世紀もまだまだ現役のトップリーダーとしてご活躍が期待される御三方に拍手喝采です。

立食パーティー後は



池田正明氏

立食パーティー後は

### ⑥「21世紀の環境問題を考える」と題して、国会議員



鮫島宗明氏

鮫島宗明氏より初日最後の招待講演がありました。鮫島氏は生分解性ゴミ袋を開発したが行政側が現状ではこれを受け入れていない。しかし、農学の専門家としても環境問題に取り組んでいきたいと強く抱負を語って下さいました。

<㈱加藤美峰園本舗 吉岡 薫>

## 2000年記念シンポジウム報告<第2日目>

### 講演会(2) グローバル化への戦略を考える / 講演会(3) 21世紀における共生と競争

[グローバル化への戦略を考える]

①「規格・標準委員会報告」石井蔵之助氏(日本ミロポア㈱)

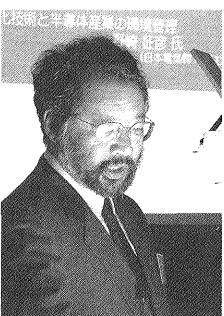
規格・標準委員会は昨年秋に設立した。現在、横浜国立大学 松本幹治教授のもとに、6名の委員が2ヶ月に1回のペースで委員会を開催している。現在、「ろ過」に関する用語集の原案の作成を進めており、今後は分科会を発足して推進していく方針との報告があった。



石井蔵之助氏

②「LCP分科会報告」石川雅紀 助教授(東京水産大学)

LCP分科会は今年の1月に発足し、本分野の第1人者である石川助教授のもとに、12名の委員で活動している。今までに6回の分科会を開催し、現在は液体廃棄物処理システムを事例として実践的な手法の演習を行っている。また、今後の企業理念として、販売製品の有する経済性だけの評価ではなく、環境評価が必要であることが、海外事例をもとに報告があった。



石川雅紀助教授

③「台湾における液体清澄化技術の現状と将来」呂 維明教授(台湾国立大学)

台湾における液体清澄化技術について報告があった。台湾は急激な工業化が進んでいるが、液体清澄化設備の多くが輸入品となっている。これは、製作技術は進んでいるが、市場にあった独創的な設計や技術が遅れていることが原因である。その対応として、技術者の育成と官民学の連携が必要とのことであった。



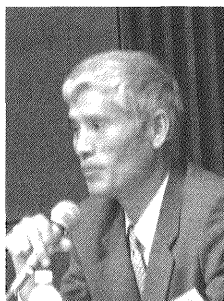
呂 維明教授

[21世紀における共生と競争]

「21世紀における共生と競争」は横浜国立大学の松本幹治 教授のIntroductionから始まり、発表者はユーザー側からキッコーマン㈱ 本間茂氏、日本電気㈱ 野崎征彦氏、メーカー側から栗田工業㈱ 矢部江一氏、㈱石垣 菅谷謙三氏、商社からは㈱ニシヤマ 水野滋雄氏であった。



本間 茂氏



野崎征彦氏

各発表では競争というキーワードからは、同業他社との差別化が大きな位置にあるといえる。製品開発事例からは、キッコーマン㈱の衛生検査手法の開発、㈱石垣の脱水機、ろ過器、ポンプの開発、栗田工業㈱の超純水製造装置の開発、等の報告があった。㈱ニシヤマは商社として顧客情報に基づき、メーカーへの開発を依頼して

いる。

次に「21世紀における共生と競争」をテーマに、松本教授の司会によるパネル・ディスカッションが行われた。パネリストには講演者である本間氏、野崎氏、矢部氏、菅谷氏、水野氏のほか、磯野誠氏(桜エンドレス㈱)、廣川一男氏(廣川産業技術研究所)、山本崇智氏(第一製薬㈱)にご参加願ひ活発な討論が行われた。個々に分野が異なるが、共生というキーワードに対し、異業種との交流をもって市場への取り組む方針は共通していた。



矢部江一氏

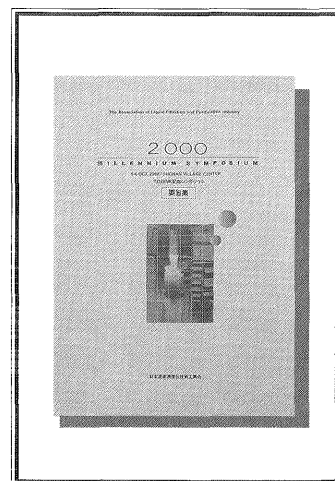
以上、発表概要を記載したが、シンポジウムの成果として発表内容だけではなく、人的交流も深められ、盛況に終了したと思う。この成果をステップに日本液体清澄化技術工業会の発展を期待したい。



菅谷謙三氏

以上、発表概要を記載したが、シンポジウムの成果として発表内容だけではなく、人的交流も深められ、盛況に終了したと思う。この成果をステップに日本液体清澄化技術工業会の発展を期待したい。

<日立プラント建設㈱ 奥野 裕>



シンポジウム要旨集  
(必要な方は「連絡板」をご覧ください)



水野滋雄氏

## LCP分科会より

**Life Cycle Perspective (LCP)** LCPとは、製品、サービスや事業活動を資源の採掘から廃棄に至るまでのライフサイクルを通じて評価する見方という意味です。現在話題になっているLCA、Life Cycle Cost Analysisのような経済的影響を評価するツールもカバーする概念です。

LCPという言葉は、一般に使われている言葉ではなく、分科会のテーマを議論していたときに生まれた造語です。LCPは見方ですから、ツールそのものとは違います。

LCPを持ったツールは、LCA、ライフサイクルコスト分析、サブスタンスフロー分析(SFA)等Chain Analysis で取り上げられるツールはすべて含み、産業エコロジーも入ります。

**LCP分科会の目的** LCP分科会の目的はLCPを持ったツールについて実践的に研究し、液体清澄化技術について実際に適用し、理解を深めることによって液体清澄化技術の幅を広げることです。

**活動実績** 現在の会員数は12名で、2000年1月25日に第1回LCP分科会を開催し、これまで7回の分科会を開催しました。

第1回の分科会では分科会としてのテーマ、進め方について議論し、まず最初のステップとしてはデータの精度は問わず最後まで一通りの作業を行うことによって手法に対する全体的な理解を目指すこととしました。最初のテーマとして液体廃棄物処理システムの環境・経済評価を取り上げることとしました。第2回の分科会以降では、LCAに関する学習、環境解析ソフトの説明の他、液体廃棄物処理システムの分析作業を進めた。公平な比較を行うためのシステム境界の設定方法としてはLCAで用いられるシステム拡張の手法を経済的影響評価にも適用することとしました。システムを定義した後、それぞれのシステムのマテリアルフローを決め、分担してデータ収集を進めています。廃棄物の乳酸発酵、焼却、発電、収集、コンポスト等については概略のデータが集まりつつありますが、工業的な乳酸発酵プロセス、メタン発酵などについてさらにデータ収集を進める必要があります。

**今後の予定** 年内を目標に、乳酸発酵による液体廃棄物処理システムの環境・経済評価について作業をすすめ、分科会として報告書にまとめます。

次のテーマとして演習問題ではなく、現実の問題に挑戦する予定です。現在候補に挙げられているのは、液体清澄化技術もしくはプラスチックリサイクル技術の環境評価、経済評価等です。また、日頃見る機会の少ない、リサイクル関係の企業の現場の見学会も計画しています。

<LCP分科会幹事 東京水産大学 石川 雅紀>

## 展示会報告

### ウェステック2000 廃棄物処理・再資源化展

廃棄物に関する最先端技術を一堂で紹介する「ウェステック2000」が11月28日から12月1日の4日間、千葉の幕張メッセで開催された。ウェステックは今回で10回目の開催となり、最近の廃棄物リサイクルに対する世間の関心の高まりから、業界の人のみならず一般の方々も多く見受けられた。今回の出展規模は国内外合わせて約250のメーカー及び団体で海外からは欧州連合(EU)諸国からの出展があり、別途にテクニカルセミナーによるプレゼンテーションが行われるなど、日本に対する市場参入の関心の高さを感じた。このような点から、参加者側または出展者側においても、ボーダーレス化が進んだ展示会であった。



会場入口付近

出展内容は、焼却・溶融、生ごみ処理、破碎、再資源化、排水処理等の技術及び装置が紹介されており、大手プラントメーカーのブースでは、都市ごみのスラグ減容化・再資源化及びダイオキシン発生の抑制が可能なガス化溶融設備を展示しているのが目立ち、多くの見学者で賑わっており関心の高さを感じた。また、ブースでの説明方法も、出展者自身によるプレゼンテーションや演劇風での紹介など多様化しており、参加しやすい工夫がされていた。

また、海外からの展示で目を引いたのは、微生物処理による廃プラスチック・廃油から燃焼用燃料を再生する技術であり、ペットボトル等プラスチック回収を行っている日本にとって、今後、需要が増す技術になりうる可能性を示し、新世紀へのリサイクル事業の開幕を予感させるものであった。今後、廃棄物分野での最先端技術はますます必要になり、各企業・団体の更なる努力が望まれる。

<㈱荏原製作所 大場 将純>

### セミコン・ジャパン2000

2000年12月6～8日の3日間にわたり、幕張メッセにて第24回セミコン・ジャパン(半導体製造装置・材料の国際エキシビジョン)が開催された。主催者であるSEMI(Semiconductor Equipment and Materials International)は、世界の主要な半導体/フラットパネルディスプレイ(FPD)製造装置材料メーカーが所属する非営利の工業界組織であり、具体的な活動の一つとして、年間14の展示会を世界的に運営している。セミコン・ジャパンは、1977年に開催されて以来、毎年この種の展示会の中では最大規模を誇っており、特に今年は、出展国数26カ国から、1,590社を越える企業が出展し、展示小間数が4,400以上というセミコン・ジャパン史上最大の展示スペースとなった。このことについて主催者側では、2000年の半導体産業の力強い景気回復が追い風になったと分析しており、今回の展示会を21世紀に向けた大口径300mmウェハ0.13μmルール微細化技術をはじめとした具体的研究成果の集大成と位置づけている。来場者数は、昨年比6.8%増の121,155名であった。



会場入口付近

本展示会の趣旨からしても来場者の関心はプロセス関連に集中しており、ユーティリティ関連のブースはどうしても地味にうつる。フィルターにおいても、ガスや薬品の精製など、ユースポイントで使用される製品の展示が目立つ一方で、超純水製造に欠かせないとされるRO膜の展示は0であった。また、オゾンやCMP排水処理といったキーワードが示すように、クリーン性の追求だけではなく、排水・廃液への配慮がより強くほどこされてきているのは、ここ数年のひとつのトレンドであろう。フィルターの素材としても、その流れに対応すべく、フッ素や無機系などの耐久性あるものが増えてきているように感じた。

<日東電工(株) 藤原 幸生>

## 企業紹介

### 株式会社石垣

当社は、昭和33年石垣機工製作所として発足し、昭和35年に石垣機工、平成8年に現在名に変更しました。創業以来、多方面にわたる技術革新に努め、独創的なろ過機、分離機、乾燥機、ポンプなどを開発、昭和35年に純国産の連続式真空ろ過機、流動層乾燥冷却機を製品化しました。昭和47年に単式ろ布単独走行全自動ダイヤフラムプレス(ラースタフィルター)を製品化、平成2年には、外筒回転型スクリュープレス(アイエスジーケー)を製品化しました。平成3年には、セラミック精密ろ過システムを発展させた膜ろ過浄水システムを完成させ、平成4年からは限外ろ過膜浄水システムを販売しています。

この間生産拠点となる坂出工場を香川県坂出市に建設し、機器メーカーとして信頼を育む一方、各種プラントのトータルプランニングおよびエンジニアリングメーカーとしても、水処理、汚泥処理、生産プロセスなど多くの分野で高い評価を得るに至りました。

当社は省力・省資源、高効率化のために、より高度な技術展開に総力を結集しています。(三谷 啓司)

### ダウ・ケミカル日本株式会社

当社は、その前身であるダウ・ケミカル・インターナショナル日本支店(1955年開設)を引き継ぎ、日本で外資の企業活動が自由化されたのを契機に1974年に設立されました。当社は、基礎化学品、機能化学品、プラスチックなどを輸入あるいは国内生産して販売しております。

セパレーショングループにおいて、清澄化技術に関わるイオン交換樹脂と逆浸透膜、ナノろ過膜を展開しています。イオン交換樹脂「ダウエックス」は、工業用水の軟水化、純水化はもちろんのこと、糖、澱粉、アミノ酸、抗生物質などの分離精製、また超純水を大量に必要とするエレクトロニクス産業や原子力・火力発電プラントなどで使われております。「フィルムテック」膜製品は、海水・かん水の淡水化やエレクトロニクス用超純水の製造、および食品産業、工場排水・下水の処理など広い用途で威力を発揮します。

イオン交換法と膜分離法を通じて社会に貢献し、常に顧客の満足を得られるよう質の高い製品とサービスの提供に努めて参ります。(宮本 英樹)

### 株式会社新菱フィルテック

当社は、平成10年10月清澄液関連業務の一層の拡大を図る為、㈱テクノ大手のフィルタ関連部門が分社独立し設立されました。

以来、清澄液処理用フィルタハウジング・フィルタカートリッジを軸とし、半導体・製薬・食品・化学薬品・塗料・機械・金属・鉱業等の各種工業用ろ過機及び超純水製造装置、油水分離装置等の設計・製作・販売に取り組んでまいりました。

政府の提唱する“IT革命”或いは“ISO”等が席捲し、高度情報化やグローバル化等大きな変革の波が各産業分野に浸透する中、“清澄液”は様々なシーンで重要な役割を担い続けております。

当社はこのような現状の中、三菱マテリアルグループのFILTRATION事業の一翼を担い、広く社会に貢献してまいりたいと考えておりますので、今後とも宜しく御引き立て下さいますようお願い致します。(佐藤 尚敏)

### 日本リファイン株式会社

当社は、昭和41年石油化学産業が飛躍的な発展を見せる中、その根幹である石油の入手を産油国からの輸入に頼らざるを得ない日本において、この貴重な資源のリサイクルを通じて徹底的に有効利用することこそ、やがて日本経済発展の支柱になると確信して、廃溶剤のリサイクル事業を起こしました。

時代は大きく変貌を遂げ、環境に関する法令や制度等が強化されるとともに、各企業は環境保全に配慮した生産設備の設置に取り組みはじめました。

#### 1. 精製リサイクル事業

◎廃溶剤の精製リサイクルの受託 ◎工業グレードから、お客様のニーズに合った高精度製品への精製 ◎海上輸送又は貯蔵タンクでコンタミネーションした溶剤の精製 ◎無機塩類のリサイクル又は精製 ◎樹脂類のリサイクル又は精製

#### 2. 環境エンジニアリング事業

◎長年の精製リサイクル事業をベースにノウハウを付加したエンジニアリングが可能 ◎当社の生産設備で実証試験が可能 ◎溶剤を熟知した能力の高いオペレーターが、設備設置後、短期間で立ち上げる。また、オペレーターの教育も可能 ◎お客様で不要となる溶剤や廃棄物を引取ることが可能 ◎設備設置までの間は、当社設備で受託精製を行うことが可能 ◎PRTRに対応するエンジニアリングが可能

常にお客様の満足の得られる信頼の高い技術とサービスの提供を目指し、より一層社会の発展に貢献するよう努めてまいります。(川瀬 泰人)

## 2001 主な展示会ガイド

第30回インターネブコン・ジャパン	1月 17日 ~ 19日	東京ビックサイト
ENEX 2001 (第25回地球環境とエネルギーの調和展)	2月 7日 ~ 9日	東京ビックサイト
FOODEX JAPAN 2001	3月 13日 ~ 16日	幕張メッセ
生産システム技術展 2001	4月 18日 ~ 21日	インテックス大阪
2001 国際食品工業展	5月 14日 ~ 17日	東京ビックサイト
2001 NEW環境展	5月 29日 ~ 6月1日	東京ビックサイト
JPCAショー 2001	6月 6日 ~ 8日	東京ビックサイト
第14回インターフェックス・ジャパン	6月 27日 ~ 29日	東京ビックサイト
第5回機械要素技術展	7月 4日 ~ 6日	東京ビックサイト
下水道展2001東京	7月 24日 ~ 27日	東京ビックサイト
2001分析機器展	9月 5日 ~ 7日	幕張メッセ
食品開発展2001	9月 26日 ~ 28日	東京ビックサイト
第23回フード・ケータリングショー	11月 6日 ~ 9日	東京ビックサイト
2001NEW環境展・名古屋会場	11月 8日 ~ 11日	ポートメッセ名古屋
INCHEM TOKYO 2001	11月 27日 ~ 30日	東京ビックサイト
セミコン・ジャパン2001	12月 5日 ~ 7日	幕張メッセ

## 行事予定表

2001年最初の行事は下記のように決定しました。多数の参加を期待しております。

### 見学・講演会

場所：サッポロビール 千葉工場(千葉県船橋市高瀬町2番)

日時：2001年2月21日(水)

### スケジュール

◇ 受付 13:00(現地) ◇13:10~13:40講演(飲料水  
 用水処理技術<水道~清涼飲料用水>/日立プラント建設(株)) ◇13:50~14:50講演2(バイオガス燃料による燃料電池システム/サッポロビール(株)+電池見学) ◇15:00~15:50一般見学(アストロビジョン:映画~ビール製造ライン) ◇16:00~ビール試飲

\*詳しくは、案内状をご覧ください。

## 連絡板

### 会員企業登録用紙提出について

昨年、8月末日を締切り日として首題の用紙提出をお願い致しましたが、現在に至っても34社の提出に留まっております。この用紙は今後IT委員会にてLFPIホームページの会員企業紹介に利用するなど大きな意味を持つものです。会の今後の作業に差支えが出てきておりますので、**未提出の会員企業**におかれましては、当会窓口となる担当者が確認の上、**大至急事務局宛送付下さる様**お願い致します。

### 2000年シンポジウム要旨集

当日予定がつかず、残念ながら2000年シンポジウムに参加出来なかった方への講演要旨集を販売致します。

会員 ¥4,000 非会員 ¥10,000 事務局宛連絡下さい。

## 編集後記

今回は2000年記念シンポジウムというLFPIにとって20世紀最後の記念行事を特集しました。広報委員会にとって20世紀最後の編集で、21世紀最初の発刊という記念すべき編集作業になり、広報委員の心に特別な印象を残しましたが、同時に広報委員会もニューズレターに期待される機能と役割の向上に努力していきます。 <印南 順一>

編集/発行：日本液体清澄化技術工業会 広報委員会  
 住所：横浜市戸塚区上矢部町2107-3 〒245-0053  
 TEL (045) 811-1533 FAX (045) 813-9450  
 LFPIホームページ <http://www.lfpi.org>